

サドとその時代

宮 本 陽 子

Sade, Vie et Ecriture

Yoko MIYAMOTO

0

1761年、『新エロイズ』を発表したルソーは、大勢の見知らぬ読者たちから共感の手紙を受け取る。共感とは読んで字のごとく、感情を共にすることである。実際、18世紀の読者たちの共感が、『新エロイズ』を書いたルソーの期待通りのものか否かは別にして、当時の読者たちは、この小説のなかに自分たちの気持ちと同一のものを見いだした、否、見いだしたと信じたのであった。ここに、そうした読者のひとりがしたためた手紙がある。

私は若い妻と誠実な愛情の絆で結ばれておりますが、一緒に暮らしているという習慣からくるただの愛情と思っていたものが、実はこのうえなく優しい愛なのだということを、あなたは私ども夫婦に教えてくださいました。28歳の私は4人の子供の父親ですが、あなたの教えを守って子供たちをまともな人間に育てるつもりです¹⁾。(強調は宮本)

もちろん、『新エロイズ』を読んで自分たち夫婦の愛情が「このうえなく優しい愛だということ」を知ったという、この読者の言葉に偽りはあるまい。しかし、この小説に「ただの愛情」を「このうえなく優しい愛なのだ」と読者をして信じ込ませる力があったのだとも言えよう。彼は自分が生きている現実、自分では語るに値しないと思っていた現実が、ルソーによって語られ、ひとつの価値を保証されたものと信じたのだ。この読者に限らず、共感を感じた読者のほとんどは、ルソーの言葉が自分たちの現実を肯定的に語っているのと感じた、語っているのだと信じたのである。それはまた、自分たちの現実を作者も共有してくれる、自分も作者と同じ世界にあると信じることである。ある女性の読者に至っては、彼女自身と作者ルソーをジュリとサン＝プルーのカップルに見立てようとしているほどである²⁾。

いずれにしても、非常に多くの読者がこの小説の言葉が彼らの現実を語っているのだと信じてきたことの背景として、ルソーというひとりの天才の技量もさることながら、その時代のイデオロギーも無視してはなるまい。すなわち、台頭するブルジョワジーの恋愛観、家族観、労働観、価値観が現実に応がりつつあったものの、まだ肯定的に自らを語る言葉を持っていなかったところに、『新エロイズ』が言葉を与えてくれたのだと信じうるような、そうした社会的心性ができあがっていたのである。先に引用した手紙からも窺われるように、ブルジョワジーは『新エロイズ』のなかに、恋愛は美しいものであり、自分たちの家族を結びつけているのは感受性豊かな愛情であり、彼らの日常を支える勤労、質素であっても快適な生活といったものが美德であり、また、そうした美德をまっとうすることが良き市民として国家への奉仕となるという³⁾、自らの限りない肯定と採用すべき指針が書かれていると信じたのだ。つまり、この作品は彼らに、イデオロギーのなかでまだ然るべき位置を保証されていないと思っていたブルジョワジーに、自分たちがイデオロギーの内部にいるのだという確信を与えたのである。さらにまた、この作品がブルジョワのみならず、貴族からも広く支持されたこともつけ加えておかねばなるまい。それは、ルソーの筆の力が貴族にとってさえもブルジョワジーの世界観を魅力的に描きだしたということであると同時に、すでに貴族階級のなかにブルジョワジーのイデオロギーが浸透しつつあったということでもある。無論、『新エロイズ』はこうしたイデオロギーによって回収されてしまうような作品ではない。けれども、読者は、とりわけ同時代の読者はこれをイデオロギーの文脈に置いて読むことを逃れえない。イデオロギーの言語のうちにこれを解することを逃れえない。そして、皆がそこに同じひとつの意味を読むものと信じて疑わないのだ。イデオロギーの言語はひとをイデオロギーの内部に位置づけ、自分と他を、個と全体を結びつける。

さて、大勢の読者が『新エロイズ』への共感の涙に咽んでいたのは、『百科全書』が刊行された時代でもあった。ディドロの編集による『百科全書』は『新エロイズ』よりも10年早く、1751年に第1巻が刊行され、1772年に全17巻と11巻の図版をもって完結するが、さらにマルモンテルの編集による「補巻」まで入れるならば、1780年まで刊行が続けられる。国王の寵姫ボンパドゥール夫人やマルゼルブといった、当時の有力者の政治的、金銭的援助に頼って準備された『百科全書』であったが、第一の読者はやはりブルジョワジーである。

『百科全書』は、網羅すべき領域が広大であり、そのため執筆者も多数であったために、これをどのようなものか一言で要約することは困難であるが、それでも「百科全書趣意書」に述べられた次のような言葉は、この辞典の性質を適切に表していると言ってよいだろう。

それゆえ、技術と学問のあらゆる領域にわたって参照されうるような、そしてただ自分自

身のためにのみ自学する人々を啓蒙すると同時に他人の教育のために働く勇気を感じている人々を手引きするのにも役立つような、ひとつの「辞典」を持つことが大切だ、と私たちは信じたのである⁴⁾。(強調は宮本)

ここにあるのは、知識に対する信頼、技術と学問の発展、つまり進歩、それも集団的、社会的進歩というものに対する肯定である。そしてまた、ここで述べられているように「啓蒙」と「教育」の内容が「学問」だけでなく、「技術」を対象としていることに注目したい。実際に、この辞典では、膨大な量の図版が技術の説明のために用意されている。なぜこれほど技術が重視されているのか。それは他ならぬ技術こそが、ブルジョワジーの力となり利益となるからである。つまりこの辞典は、進歩的ブルジョワジーのための辞典であるということなのだ。

ところで、18世紀思想の集大成といえる、この『百科全書』の執筆者たちを中心に、18世紀思想の主流にある哲学者たちは総称として、通常、「フィロゾフ」と呼ばれている。彼らの社会的立場は、ルソーが都市や農村の独立小生産者の利益を代表しているのを例外にすれば、ほとんどすべて、所有権を基本的権利とする商業ブルジョワジーの立場を代表するものである。またフィロゾフの大半は「人間精神の進歩と哲学的理性の未来」⁵⁾を疑わず、宗教に関しては、理神論と無神論に分かれたものの、宗教から解放された道徳、「自立できる道徳の存在を信じていた」⁶⁾点においては一致している。注目すべきは、この道徳は情念を良きものとして容認する道徳であり、また社会的道徳であるということ、すなわち、隣人の情念と自分の情念を折り合わせる、折り合いの学であるということである。彼らによれば、「最も快い情念は他人のために滅私することであり、最も確かな享受とは《人類愛 l'humanité》である」⁷⁾ということである。こうした愛他的モラルを18世紀は「思いやりと人間性 (強調はモルネ)」⁸⁾と呼んでいたが、この人間性なるものに寄せる限りない信頼と人間中心主義は、多少の例外を別にすれば、自然科学や実験科学の分野にまで浸透していた。モルネによれば、「すべては人間のためにつくられている (強調はモルネ)」という暗黙の了解に基づいたこの時代にあって、物理学も博物学も、自然を我々に奉仕させるための学問であると考えられていたということである⁹⁾。

このように、18世紀中頃から後半にかけて主流となったブルジョワジーのイデオロギーと人間中心主義の思想の影響のもとで、革命が準備され、さらにその後の市民社会に続いてゆくわけであるが、旧体制の大貴族に生まれ、その放蕩ゆえに投獄されていたサドが、革命前のヴァンセンヌやバスチーユの牢獄で貪るように読んだのも、ヴォルテールであり、ルソーであり、ビュフォン、ドルバックといったフィロゾフたちの著作であった。

ルソーより28年遅れて、メルシエと同年の1740年に生まれ、1777年から1790年までの13年余

りを旧体制の牢獄で過ごしたサドには当然、フィロゾフの仲間として共闘を組んで新しい精神の普及のために当局と戦うという体験はない。また、彼らの著作を読んでいるサド自身は高等法院によって断罪され、王権によって牢獄に押し込まれていたにせよ、彼が牢獄にいた時代においてはもはや、フィロゾフたちの思想や精神の普及に反対するものではなく、当局との間にも本当の意味での闘いはもう存在していなかった。その頃、ドルバックやドリール・ド・サル、レナール、ボーマルシェといった不穏な著作を発表した者たちも、一時的に投獄されたり、亡命を余儀なくされることがあったものの、そのためにいっそう人気を高め、拍手をもって再び世間に迎えられる¹⁰⁾。つまり、それだけ彼らが世論の共感を得ていたということであり、またそれだけ世論というものの力が強くなっていたということでもある。フィロゾフたちが普及させた精神はもはや新しい精神としてではなく、ブルジョワジー自身の精神と同一のものとして読まれるに至っていたのであり、そうしたブルジョワジーが経済的のみならず社会的にも強くなっていたのである。ブルジョワジーのイデオロギーはもはやひとつの階層内のイデオロギーというよりも、社会全体を包括するものになりつつあったのだ。

ところで、18世紀後半のこうしたブルジョワジー以上に、またロベスピエールのような革命家たち以上に、ルソーやフィロゾフたちの著作に親しみ、影響を受けていたサドであったが、彼が1791年に匿名で発表した『ジュスチヌ』¹¹⁾は公序良俗に反するという悪評によって有名になり、サドはこの不道德な作品の作者としてロベスピエールによって革命政府の牢獄に、さらにナポレオンによって執政政府の牢獄、そして精神病院に追いやられ、社会から隔離されたまま生涯を終えることになる。革命に前後して、ポルノグラフィが溢れるように出廻ったこの時期において、サドほど非難、中傷、迫害を一身に集めた作家は他にあるまい。

ルソーの信奉者を自ら任じ、清廉潔白を誇り、不道德を退廃した貴族の属性として蛇蝎のごとく嫌い、「墮落した人間は共和国の敵である」¹²⁾と喝破したロベスピエールが、共和主義者の言辭を弄しているサドに疑いのまなざしを向けたことや、あるいは、近年になってようやくサドとほぼ同時にプレイヤード全集に迎え入れられたレチフが¹³⁾、民衆の健全な勤労精神や市民意識を振りかざしてサドを弾劾したのは、旧体制の封建貴族、それもアルクイユ事件¹⁴⁾やマルセイユ事件¹⁵⁾といったスキャンダルを起こした張本人である放蕩貴族としてのサドに対する憎しみ、つまりひとつの身分、階層に由来する風俗、文化に対する嫌悪として理解することも可能であろう。しかし、サドと同様、南仏貴族の出身で、サドに負けず劣らず放蕩者であった執政官バラスからも、サドは激しく忌み嫌われている。バラスが『回想録』のなかでサドに当てている言葉は反感を語って余りある。

人類＜l'espèce humaine＞にあってひとつの奇形とも見做しうる、この異常な人物（サ

ド)の生涯をここで語る必要はない。(……)そして、あたかも彼の墮落した残忍な思想を自分の肉体でまだ十分に試していないのだ、とでも言わんばかりに、サド氏は、事を完璧にするには、自分の思想が生涯最後の慰めを満たし、道德のすべての限界を覆さねばならないと考えていた。そうやって彼は、自分に共鳴してくれる者をひきつけ、彼の罪深い道に引きずり込み、決意を固めさせるために、小説という形で、雄弁の魅力と厳密な論理をもって、この世の不幸は専ら我々が美德と呼ぶものに振りかかり、悪徳は完全な幸福によって称えられるのだということを示そうとしたのだ(……)¹⁶⁾。(強調は宮本)

ここでバラスは、サドという人物とその作品を同一視したうえで、サドあるいはサドの思想が、「奇形」であり、「限界」を超えたものであること、すなわち皆と違うことを述べ、しかもサドの言葉には「共鳴」する者を見いだす力があることを認めている。こうした評価は、『ジュリエット』において、最も広く最も長い効果をもつ犯罪は「教唆と感化、著述」による犯罪であると主人公に語らせている¹⁷⁾作家サドにとって、あながち不名誉なものではないにせよ、スキャンダルと筆禍によって監禁されている生活者サドにとっては甚だありがた迷惑な評価であろう。また、バラスが強調しているのはサドの言葉の「魅力」ではなく、その危険性であり、それに対する嫌悪と警告である。サドという人物のなかに、自分、否、「人類」と同一のものを認めない、認めてはならないという、排除への強い意志をバラスは表明しているのだ。ここでいう「人類」とは、ある身分階級に基づいた概念ではなく、18世紀が満場一致で合意しているひとつの概念と見做すべきだろう。すなわち、モルネがいうところの「愛他的モラル」のことであり、18世紀の人々が「思いやりと人間性」と呼んだところのものであり、それはまさに、18世紀後半のイデオロギーの中核をなすものと考えてよいだろう。

ルソーの読者がルソーの作品のなかに、「子供たちをまともな人間に育てる」ための教えを見いだしたのは反対に、30年後、40年後、サドの告発者はサドのなかに「人類」がそうあってはならないもの、イデオロギーが排除しようとするものを見いだすのだ。18世紀が総力をあげて培ってきた「愛他的モラル」に基づいて、人々はサドのなかに「愛他的モラル」と同一ならざるもの、すなわちイデオロギーの外部なるものを見たのであり、彼らがサドについて語るイデオロギーの言語は、必然的にサドをイデオロギーの外部に位置づけるものとなる。それはとりもなおさず、サド自身がイデオロギーの外部で言語と関わった、あるいは関わろうとしたということに他ならない。

ところで、イデオロギーの外部とは、本来あってはならないものであり、具体的には、まず第一に犯罪行為が挙げられる。もうひとつは、イデオロギーの言語秩序そのものに揺さぶりをかけようとする、言うなれば、イデオロギー言語に対してイデオロギーを脱構築するため

の言語を対峙させようとする言語活動が挙げられるであろう。しかし、実際、犯罪を犯罪と呼ぶものがイデオロギーであるから、ある何らかの行為は犯罪と呼ばれることによってイデオロギーの言語秩序に組み込まれざるをえない。一方、イデオロギーの脱構築についても、ひとが辞書にある言葉以外の言葉を使いえない以上、イデオロギーを脱構築するための言語を創り出すことなど不可能である。現実的にはせいぜい、辞書が指示する意味を逸脱させること、つまり、イデオロギーの言語秩序のなかに外部を持ち込もうとすることに甘んじざるをえない。したがって、犯罪行為にせよ、意味の逸脱にせよ、イデオロギーの外部とは、より正確に言うならば、いずれもイデオロギーの内部にあってその存続を脅かす、内部の外部としてしか存在しえないものである。

サドが行なったこと、それはもちろん、彼の人物たちが作品のなかで実行したような犯罪行為ではなく、言語活動における犯罪に他ならない。しかし、それがイデオロギーの内部の外部であるという点において、実際の犯罪行為と同じくらい、否、サドが作品の人物にしみじみと言わせたように、言葉による犯罪は実際の犯罪行為よりも広く永い効果を持ちうるがゆえに、実際の犯罪行為以上に、彼の読者を憤慨させたのだ。

以上のような観点に立って、サドとその時代とのいわばねじれた関わりのなかから、彼の特異性の謎の一端を解きほぐしてゆこうというのが、この拙論のねらいである。

1

1791年、サドが「あの破廉恥な『ジュスチヌ』*《cette infâme Justine》*¹⁾」を出版し、「『ジュスチヌ』の破廉恥な作者*《l'infâme auteur de Justine》*²⁾」と呼ばれるようになる以前は、彼の同時代人にとって、サドは1768年のアルクイユ事件と1772年のマルセイユ事件という、いずれも女工および娼婦に対する虐待と瀆神行為によるスキャンダルで悪名高い、旧体制の墮落した放蕩貴族にすぎなかった。彼はアルクイユ事件によって、ソミュール、ついでピエール=アンシーズで半年余りの牢獄生活を強いられる。そして、次のマルセイユ事件ではヴァンセンヌ、バスチーユなどの牢獄で13年余りを過ごすことになる。

革命前の社会において放蕩三昧に明け暮れた大勢の貴族たちのなかで、何故サドだけが殊更に厳しく罰せられたのであろうか。1991年、詳細な資料に基づく実証的な『サド伝』³⁾を著したモーリス・ルヴェは、アルクイユ事件が一大スキャンダルに発展した要因について、大きく分けて7つの理由を挙げている。

ルヴェが第一に挙げているのは、「世論」⁴⁾である。「弱体化していた中央権力は次第に、この世論という新しい力を見くびることができなくなっていたが、世論は、貴族たちが行う性的

虐待を法廷が罰さないこと、少なくとも大目に見過ぎることに對し、長い間苛立ちを顯にしていた。貴族たちが罪を見逃されるのを見飽きた世論は、法の正義を示してくれるように要求した。そこでサド侯爵が差し出されたというわけだ⁵⁾。この同じ世論が、フィロゾフたちの筆禍に際し、彼らの味方についたため、当局が妥協したことについては前章ですでに述べた通りであるが、一方、このアルクイユ事件において、サドを幼少時代から非常に可愛がっていた貴族のサン=ジェルマン夫人は、こうした世論を「公衆の瘡痍さ」(《il est victime de la férocité publique》)⁶⁾と呼んでいる。次にルヴェが挙げるのは、サドの用心さである。サドはすでに5年前の1763年に同じような事件を起こしており、その時からマレ警視が彼の素行に逐一目を光らせていた⁷⁾にもかかわらず、サドはその後も、このお目付け役の鼻先で不用心に、女優たちを相手に派手な放蕩に耽っていたのであった。加えて、時の大法官モーブーがサドの義父で裁判所長官モントルイユに対して抱いていた個人的な敵意が災いしたのだ、とルヴェは説明する。さらに運の悪いことには、サドがアルクイユ事件の舞台に選んだのが、高等法院刑事部長官の貸家であったために、この大家にして刑事部長官の関心を殊更に掻き立ててしまったということである。また、かつてサドの父親がルイ15世の宮廷を相手に係争を起こしたことも、不運のひとつとしてルヴェは数えている。またサド本人も宮廷で行なわれた自分の結婚式を欠席するなど礼を欠いていたために、ルイ15世の覚えが悪かったことをこの評伝の著者はつけ加える。そして、最後の締め括りとしてルヴェが挙げるのは、サドの性格である。ルヴェはサドを「友もなく、仲間も持たず、社会生活において根無し草のような」⁸⁾孤独な人物として描きだす。フロサックらの当世風のリベルタンたちが徒党を組んでいたのと異なって、サドは放蕩も含めて、いかなる状況においても、「独りきりで《isolé》」、「あらゆる交友の外に《en dehors de toute convivialité》⁹⁾」いたという。「本質的に庇護関係と縁戚関係に基づいた旧政体であって、こうしたサドの姿は孤独であった」¹⁰⁾とルヴェは結んでいる。

以上のようなルヴェの観察は、革命前の社会の断面を鮮やかに見せてくれる。すなわち、世論を武器にした民衆と、貴族と、法曹界の力関係が緊張しつつあること、国家が個人の私生活を観察の対象、管理の対象としていること、そうしたなかでなおかつ、国家は庇護関係や縁戚関係に基づいた小さな社会の集まりであり、そうした小さな社会のひとつのうちに通常の日常生活が営まれる、といった状況が了解される。実際、サドがアルクイユ事件の5年前に起こした女工相手の事件の際は、事件が飽くまでも貴族社会のなかだけで留まったために、世論の槍玉に挙げられることもなく、したがって高等法院が動きだすこともなく、ひたすら王の管轄内において事件は処理された。アルクイユ事件で世論に突き上げられることによって、サドは初めて貴族社会という小さな社会以外の社会、小さな社会の集まりとしての国家という大きな社会と出会うのである。

ところで、王の発行する封印状によって王の囚人となるということは、旧政体の貴族にとって、名誉なことではないにせよ、法によって裁かれることを免れるということであり、これこそ彼らが法の埒外にあるという特権の顕現というべきであろう。だからこそ、サドの義母モントルイユ夫人はアルクイユ事件においても、マルセイユ事件においても、封印状の発行を求めるのである。サドを王の囚人にする事で、娘夫婦と一族の名誉を救うためにアルクイユ事件のモントルイユ夫人は奔走し、サドに改心の可能性がないことを悟った彼女はマルセイユ事件においては、ひたすら一族の名誉と財産、彼女の孫たちの将来をサドから守るために、この厄介者を王の牢獄に押し込めようと頑張るのであった。サドはこのモントルイユ夫人を生涯恨み続けるが、このやり手の義母は、当時の社会状況においてはまったく当然の事をしただけである。実際、1772年、マルセイユ事件を起こしたサドに、エクス=アン=プロヴァンスの法廷は、欠席裁判で死刑の判決を下し、サドの人型を処刑する。これはサドにとって貴族社会から排除されること、すなわち、「事実上の社会的な死」¹¹⁾を意味する。すでにアルクイユ事件で悪名を馳せていたサドは、法廷にとって、法の正義を衆目に明らかにするための、「理想の罪人」¹²⁾であったのだ。したがって、彼を王の囚人とする事は、世論と法の正義の犠牲になることから彼を救うことでもあったわけである。しかしながら、サドにとって不幸であったのは、このマルセイユ事件においては、モントルイユ夫人を筆頭に、一族からついに見限られたことである。モントルイユ夫人はサドを法の裁きから救うと同時に、この恥曝し者を一族から隔離することを選んだ。すでに「社会生活において根無し草のような」人物であったサドにとって、一族から見限られるということは、帰属すべき社会から締め出されること、社会にいていべき場所を完全に失うことを意味する。1774年、ルイ15世が死に、大法官モープーが追放になり、さらに1778年、エクス=アン=プロヴァンスの法廷がサドに対する死刑判決を破棄したにもかかわらず、王の封印状の効力は有効なまま、一族の厄介者サドは王の囚人として牢獄のなかで革命勃発を迎え、1790年まで自由の身となることがない。

さて、投獄以前から、「独りきりで《isolé》、あらゆる交友の外に《en dehors de toute convivialité》」いたサドであったが、牢獄とは、文字通り、独りきりの、あらゆる交友の外にある場所である。こうした場所に押し込められたサドが自分に与えようとしたイメージを、ミシェル・ドゥロンは次のようにふたつに分類している。まず第一は、「法律屋と徴税官からなる新興特権階級の犠牲となった貴族」というイメージ、もうひとつは、「専制君主制の犠牲となった市民」というイメージである。ドゥロンによれば、サドは「世襲の権利意識に凝り固まった封建貴族」と「新しい自由を要求する哲学者」という二重の立場を絶えず主張していたということである¹³⁾。つまり、サドは牢獄という場所にあつて、二重の発話地点を定めることで自分を正当化しようとしたのだ。しかし、「貴族」からも「市民」からも排除され投獄され

ているサドには、「新興特権階級の犠牲」あるいは「専制君主制の犠牲」という意識だけが現実であって、いずれの身分も虚構にすぎない。ルヴェはサドの封建貴族としての意識を強調しており¹⁴⁾、そのことについては反論の余地がないが、ただ、留意しておきたいのは、ルヴェも例証している通り、サドの言動には貴族としての権利意識、誇り、あるいは低い身分の者に対する傲慢さや蔑みは認められるものの、同じ階層の者たちに対する、積極的な共感といったものがほとんど感じられないということである。少なくともルソーが、素朴に実直に生きる人々を描きだす筆に込めるような共感が、貴族を描写するサドの筆に、殊更に込められているとは思えない。彼は要するに、本来、自分がいるべき貴族社会から排除された貴族、帰属すべき場所を失った人間にすぎない。大貴族に生まれ、裕福な裁判所長官の娘を妻に迎え、本来ならば、権力機構の中心近くにいてもおかしくない身分にありながら、自らの不用意が招いた事件と、社会的時代的背景、そして何よりも帰属意識のなさゆえに、サドは、権力の直轄下であり、権力機構の内部の外部ともいうべき場所、すなわち牢獄に締め出され、封じ込められてしまったのである。

旧政体において、王の牢獄という王政権力の内部の外部に締め出されたサドは、また、革命政府下においても、その権力の内部の外部への封じ込めを経験することになる。1790年、自由の身となったサドは、ピック地区の書記長を務め、「法の認可方法について」の草案を起草するなど、貴族意識を隠蔽してサン＝キュロットの言辞を弄し、共和主義を信奉する市民を装い、自分自身を偽ることで、恐怖政治下の社会の只中で生きようと努力するものの、結局は、1793年の「容疑者逮捕令<la loi des suspects>」¹⁵⁾を契機に、ピック地区の同僚から告発され、墮落した貴族に対するロベスピエールの嫌悪、『ジュスチヌ』の作者に対する憎悪によって、再び投獄される。新たな権力機構の中心近くにまで出世したとしても不思議ではない職務にありながら、またもや権力の内部の外部へと押しやられてしまうのだ。サドが自分に与えようとした「専制君主制の犠牲となった市民」というイメージは、またしても失敗に終わる。

ロベスピエールの失脚により、出獄したサドは、市民作家として、あるいは哲学者として、自分の筆を頼りに生計を立てようとする。『閨房哲学』¹⁶⁾や『新ジュスチヌ』¹⁷⁾などの匿名作品を地下出版で出す一方で、『アリーヌとヴァルクール』¹⁸⁾や戯曲等を実名で発表し、哲学小説の作者、あるいは当時はグランジャンルであった演劇作品の作者として、陽の当たる場所に出ることを夢みるものの、世間の人々にとって、彼は相変わらず、アルクイユ事件とマルセイユ事件を起こした元放蕩貴族にして、「破廉恥な『ジュスチヌ』の「破廉恥な作者」でしかない。1800年、サドに対する非難、中傷が猖獗をきわめ、ついに1801年、『新ジュスチヌ』と『ジュリエット』¹⁹⁾が押収され、「破廉恥な作者」は市民社会から追放される。まず、サン

ト＝ペラジエの牢獄に繋がれたサドは、そこで若い留置人を誘惑しようとした廉でピセートルの獄に送られ、やがてシャラントンの精神病院に移されて、1814年、そこで生涯を終える。革命後のブルジョワ市民社会は徹底してサドを排除すべく、牢獄や精神病院という社会の内部に抱えた外部に、彼を封じ込めたのであった。

こうして、サドは彼の生きたすべての権力機構、社会から疎外され、制度の内部の外部に押し込められ、「独りきりで《isolé》、あらゆる交友の外に《en dehors de toute convivialité》」生きることを余儀なくされた。本来ならば、彼がそこで特権を享受していたはずの貴族社会、あるいは、そこで権力の一端を担い、活躍していたかもしれない革命政府下の政治的社会、さらに、そのなかで文筆家として名を馳せたいと願っていた革命後の市民社会、そうしたすべてを、牢獄の外に見るという視点をおのずと定められることになる。それぞれの社会から締め出されて、サドは、その社会のイデオロギーの外部から内部を外に見るという視点、イデオロギーの内部の外部からの発話地点をとることを余儀なくされる。

また、夫人に送らせて読んだフィロゾフたちの思想も、彼にとっては外に見ざるをえないものである。フィロゾフたちより少し遅れて生まれたサドに、彼らとリアルタイムで交流するチャンスはあらかじめ余り期待できなかったにせよ²⁰⁾、社会のなかで他人とともに生きることを誇りとしたフィロゾフたちの思想や言葉は、彼らが準備しつつあった社会、つまりサドを隔離した社会同様、「あらゆる交友の外」にいるサドにとっては、やはり牢獄という孤独な場所の外にひろがる、イデオロギー内部の世界のものである。

ジャン・ドゥプランは論文「哲学者サド」において、18世紀哲学者たちの社交性を説明するために、デュマルセの書いた『百科全書』の「哲学者」の項目を引用している。「(……) 哲学者は、考察によって皆さん《vous》とともに生き、皆さんの信頼と尊敬を集め、友情と感謝でお返しするのを義務とすることを愛し、かつ喜びとする、そうした気持ちが誰よりも強い(強調は宮本)」²¹⁾。さらに、哲学者は社会一般の人々とともに生きるのみならず、哲学者同士もまたともに働く。同じく『百科全書』の「百科全書序論」において、ダランベールは彼らの仕事の集団性について次のように説明している。「(……) ひとりの著者にとって、ただその特殊な研究をするのに全生涯かかったひとつの学問あるいは技術を根本的に取り扱うのは、どんなに困難なことか。ましてや、一体、どんな人間が、学問と技術のすべてをひとりだけで取り扱おうと企てるほど、向こう見ずで短見であることができるのか。この反省から私たちが結論したことは、私たちが担わねばならぬこんな大きな重荷を支えるにはそれを分担する必要がある、ということであった(強調は宮本)」²²⁾。実際、『百科全書』という共同作業が必ずしも常に仲良く行われたわけでないにせよ、少なくとも、この辞典が分担と協力、つまりフィロゾフたち相互の交流を前提としていたことについては議論の余地がないだろう。フィロゾフたちの間に意

見の対立があったにせよ、彼らは同じ「大きな重荷」をともに担う「私たち」であり、彼らの思想は「私たち」の間のディアログから生まれたものと言ってよいだろう。『百科全書』の編集を担当したディドロの作品にはディアログ形式をとっているものが少なくないが、そこにおいて、意見の違いはあっても、一方による他方の決定的な否定はほとんど見られないのにも似て、フィロゾフの「私たち」においても、「私」と「あなた」の間で思想的差異があるにせよ、意味の複数性を抱えたまま、それでも彼らは人類の幸福のためにともに働くという目的に統合された「私たち」となりえたのであり、「私たち」はフィロゾフたちのディアログが成立する場となる。この「私たち」、「皆さんとともに」生きる「私たち<nous>」が「皆さん<vous>」に語りかけるのが、要するにフィロゾフの思想なのだ。フィロゾフたちが次第に世論を勝ち得ていったのは、彼らのディスクールが、「皆さん<vous>」を「私たち<nous>」に変えていったからである。そうして広がった「私たち」のディアログがイデオロギーを形成してゆく。

しかし、「独りきりで、あらゆる交友の外に」いるサドが、どんなに彼らの著作を読もうとも、彼は絶対に「皆さん<vous>」にも「私たち<nous>」にもなれない。イデオロギーの外部に位置づけられているということは、すなわち、「私たち」と「皆さん」のディアログが成立する空間から締め出されているということなのであり、あらゆるディアログから隔離されているということなのだ。確かに、サドもディアログ体の作品を著してはいるが、彼のディアログは形だけの見せ掛けであり、本質的には常にモノログである。サド自身の化身としての主人公リベルタンたちに語らせた、サド自身の孤独なモノログなのである。サドにおいてはディアログも、また小説内における複数の人物たちの発話も、いずれも、他者を否定し、おのれの欲望を絶対的に肯定するためのモノログに辿りつく迂回であり、紆余曲折であると言えるだろう。

近年、ドゥプランの研究やミシェル・ドゥロン監修によるプレイアード版の刊行等によって、サドが剽窃したフィロゾフの作品からの出典が次々に指摘され、サドの行なった書き替えや意味の歪曲が明らかになりつつあるが、これは要するに、サドが自らの外のものとして読んだフィロゾフたちのディアログを自らのモノログに変えることで、彼らのディスクールをわがものにしてゆく、作業の過程を示してくれるものである。そうすることでサドは、イデオロギーの言語の脱構築を謀るのだ。イデオロギーの内部の外部にあってなお、自分のものでないイデオロギーの言語以外に言語を持ちえないサドにとって、すでにイデオロギーが語ったところのものを掠め取り、その本来の意味を逸脱させることによってしか、自らの声で語るすべがない。サドが自分に定められた発話地点に立って語り始めるその時、彼は自らのディスクールの力によって、「私たち」と「皆さん」がともに生き、語らい合う空間からいっそう引き離

され《isolé》, イデオロギーのさらなる内部の外部へと押しやられてゆく。

2

サドの欲望のモノローグ, イデオロギーの脱構築を究極の目標とするモノローグを担うリベルタンたちは, サドが余儀なくされている発話地点を, 自らのものとしてむしろ積極的に引き受ける。『ジュリエット』に登場する巨人ミンスキーは, 世界中を旅した結果, 「世界全体をもってしてもなお」彼の「欲望にとっては狭すぎ」, 「世界には果てがあるということがわかったので《il (l'univers entier) me présentait des bornes》(強調は宮本)」¹⁾, 法の力の及ばない山奥に居を構えることで《Elle (la justice) est nulle dans ce pays-ci; voilà pourquoi je m'y suis placé: (...)》²⁾, 社会の枠組み《des bornes》の外に生きるリベルタンである。次の引用はこのミンスキーが自らを語ったものである。

私は, 自然が必要としている破壊に協力するために, 自然によって吐き出された怪物だ。私は人類のうちで唯一の存在なのだ……ああ, そうだとも, 私に浴びせられている悪口雑言はすべて承知しているとも, だが, 私は強者だから誰も必要としないし, 賢明だから独りきりで楽しむすべを知っていて, すべての人間を憎み, 彼らの非難をもとめせず, 私に対する彼らの感情を嘲笑い, 知識が豊かだからすべての儀式を粉碎し, すべての宗教を愚弄し, すべての神々を馬鹿にし, 高慢だからすべての政体を忌み嫌い, あらゆる絆《tous les liens》, あらゆる束縛, あらゆる道徳原理を超越し, このささやかな自分の領土で幸福に暮らしているのだ。私はここであらゆる最高権力を行使し, 専制のあらゆる快楽を味わい, 誰を恐れることもなく満足して生きている³⁾。(強調は宮本)

このミンスキーの自己描写は, 最初の章で引用したバラスの筆によるサドの肖像⁴⁾と見事に重なる。バラス言うところの「人類にあってひとつの奇形」である「異常な人物」サド, 「道徳のすべての限界を覆」そうとするサドによって, 「吐き出された怪物」, 「人類のうちで唯一の存在」であるミンスキーは, 自ら, 社会の枠組みの外に身を置き, 「ささやかな自分の領土」を内部の外部とすることで, そこに「世界全体」よりも広い, つまり内部よりも広い欲望のための場所を見いだすのだ。

ミンスキーに限らず, 『ジュリエット』や『新ジュスチヌ』に登場するリベルタンたちはすべて, 「あらゆる絆」を断ち切り, 「人類」の外部に身を置く人物たちといってよい。サン・フオンのように権力機構の中枢にある者は, 自らの権力によって制度を超越することで外部の

人となり、また盗賊クール・ド・フェールのように権力を持たない者は、何らかの手段によって、法の届かない場所に身を置くことでやはり外部の人となる。こうしたリベルタンの在り方に対して、キリスト教道徳と愛他的モラルの混合したイデオロギーによって浸透されたジュスチヌは、異議を唱えざるをえない。ジュスチヌを捕らえた女盗賊デュボワは、道徳を踏み躪り、エゴイズムにのみ従えという演説をするが、それを聞いたジュスチヌは次のように反論する。

(…………) すべての善良な人々から排斥され、すべての法律から有罪を宣告されている私たちは、私たちの頭上にぶら下っている剣を鋭くするばかりの考え方を認めるべきでしょうか。私たちがこんな惨めな境遇にさえないなかったら、社会の真ん中にいたなら、つまり、本来、私たちがいるべきところにいて、こんな不品行と不幸に塗れていなかったとしたら、それでもあなたはそうした教訓が私たちにふさわしいと考えるのでしょうか。(…………) 社会に対して異を唱える者の存在を、社会はその正当な権限において決して容認しないのではないのでしょうか。それにまた、孤立した人間<l'individu qui s'isole>が社会のすべての人々を相手に戦うことができるのでしょうか。(…………) 絶えず善行を交換し合うことが社会を支えるのであり、これこそ社会を強固にする絆<les liens>なのです⁵⁾。
(強調は宮本)

しかしながら、この『新ジュスチヌ』において、社会<société>は人々を結びつける<associer>場所という本来の意味をなしていない。登場するのはいずれも「孤立した人間」ばかりであり、また、「善行の交換」の場としての社会、「善行の交換」によって結ばれている社会など存在しない。この作品世界にジュスチヌの言葉に照応する現実はない。彼女の言葉の正当性を保証してくれるものは何もない。ジュスチヌのイデオロギー、作品の外に広がる一般社会のイデオロギーにおける言葉の意味が、そうしたイデオロギーの内部の外部で書いているサドの物語内において崩壊してゆく。それはまた、リベルタンと同質のディスクールを担う⁶⁾ 非人称的な語り手によって語られることによって、ジュスチヌの言動がことごとく、彼女自身がそれに与えようとした意味を裏切られているのと同じことである。サドのモノローグ的なディスクールが充満し、外部のディスクールが横溢しているこの作品の社会（そう呼びうるならば）には「真ん中」がない。「孤立した人間」、すべての絆<les liens>を切り離すことで自らを非人間する<aliéner>人間たちのディスクールによって、ひとつの内部が形成されているとしても、それは逆説的なものでしかありえないのである。この逆説的な内部のなかにおいて、ジュスチヌのディスクールは、外部から入ってきた異質なものとなる。

実際、ジュスチヌ以外の犠牲者にはほとんど発言権が与えられていないこの作品世界において、リベルタンたちはジュスチヌのディスクール以外のほとんどすべてのディスクールを占有しているといつてよいが、彼らそれぞれに、異なった様々な身分、立場、好み等が設定されているものの、人間は孤立した存在であるという主張においては、リベルタン全員、例外なく一致している。『ジュリエット』に登場するノワルスイユは高位の大臣職にあり、パリで暮らすリベルタンであるが、彼はミンスキーが一人称で語る孤立した人間像を「すべての人間」の普遍的な姿として語る。

そうした問題に関する私たちの最大の偏見のひとつは、私たちが根拠もないのに、他人と自分たちの間にあると思いつ込んでいる絆といったものに由来する。まったく根も葉もない馬鹿馬鹿しいこの絆を、私たちは、友愛ごときものとして宗教によって祭り上げたのだ。(……) すべての人間は孤立して《isolées》生まれ、それぞれ誰ひとりとして、お互いに他人を必要としない⁷⁾。(強調は宮本)

ここにおいて、リベルタンが、デュマルセ言うところの「哲学者」すなわち、「皆さん《vous》とともに生き、皆さんの信頼と尊敬を集め、友情と感謝でお返しするのを義務とすることを愛し、かつ喜びとする」⁸⁾、「哲学者」の対極にあることは改めて言うまでもない。より注目すべきは、リベルタンたちが一人称で語る思想も、普遍的眞実として語る思想も等価であり、彼らが皆、こうした思想に基づいて、同じディスクールを繰り返しているということである。

この同じひとつの思想、ひとつのディスクールを共有しながら、他ならぬこの思想、このディスクールゆえに、リベルタンたちは同じ内部を共有する者としての「私たち」になることができない。リベルタンの「すべての人間」、リベルタンの普遍とは、互いに相容れない個の集まりでしかない。統べることの不可能な個の集合でしかないのだ。ルソーは『社会契約論』において、個々のもの《particuliers》の上位に、それを統合する共通のもの《commun》を想定するが、リベルタンはそうした共通項を認めないことによるのみ共通しているのだ。『新ジュスチヌ』において、残忍な夫から虐待されているジェルナンド夫人に同情を寄せるジュスチヌを、リベルタン、ブレサックは次のように非難する。

あの女とおまえに何か共通するもの《quelque chose de commun》でもあるというのかね。いったい何故おまえはそうやって、愚かにも在りもしない絆をでっちあげるのだ？ おまえを不幸にするだけだろうに⁹⁾。(強調は宮本)

『社会契約論』においては、この共通なるものをもって、個人は社会全体と結ばれる。ルソーによれば、「個々の利害の対立」のうちに「個々の利害の一致」、つまり「共通の利益」があり、それが「社会の絆」となるというのである。しかし個々人の間に共通項を認めないリベルタンにあっては、個人と個人、個人と全体の対立を解消するものはない。リベルタンのノワルスイユは、「個人の利益と全体の利益の不変の対立」を推論のための明白な前提条件として挙げている。

前編で定められた諸原則のもっとも重要な第一の帰結は、一般意志 *«la volonté générale»* だけが、国家の諸々の力をその制度の目的、すなわち公共の幸福 *«le bien commun»* にしたがって、導くことができる、ということである。なぜなら、個々の利害の対立 *«l'opposition des intérêts particuliers»* が社会の設立を必要としたのであれば、その設立を可能ならしめたのは、この同じ個々の利益の一致 *«l'accord de ces mêmes intérêts»* であるからだ。こうした様々な利害のうちにある共通なものこそが社会の絆となる *«il y a de commun dans ces différents intérêts qui forme le lien social»*。そして、すべての利益がそこで一致するような *«tous les intérêts s'accordent»*、何らかの点が仮になかったとするならば、いかなる社会も存在できなかったであろう。ところで、社会はもっぱらこの共通の利害 *«cet intérêt commun»* に基づいて治められなければならない¹⁰⁾。(強調は宮本) ルソー『社会契約論』

さてこれを検討するにあたって、私がまず発見したのは個人の利益と全体の利益の不変の対立 *«la constante opposition de l'intérêt particulier à l'intérêt général»* である。人間が全体の利益 *«l'intérêt général»* の方をより好むならば、その結果、彼は有徳の士となるにせよ、一生不幸であるだろうし、反対に個人の利益 *«son intérêt particulier»* を全体の利益 *«l'intérêt général»* よりも重視するならば、法が彼を放っておいてくれさえすれば、彼は完全に幸福になれるだろう¹¹⁾。(強調は宮本) サド『ジュリエット』

従って、リベルタンは、裕福な者であれ貧しい者であれ、社会全体との取引、社会契約に決して同意することがない。ルソーは、社会契約に基づいてよく組織された国家においては、個人の精神のなかで、共通の幸福と個人の幸福がより多く一致すると述べているが、これに対し裕福なノワルスイユは、法は全体の幸福のために個人の幸福を犠牲にするものであると応じている。サドにあっては全体の幸福と個人の幸福は絶対に一致しない。

国家がよく組織されればされるほど、市民の心のなかでは、公共の事柄 <les affaires publiques> が私的な事柄 <les privées> よりも重視される。私的な事柄の方がはるかに少なくなるとさえいえる。なぜなら、共通の幸福の総和 <la somme du bonheur commun> が、個々人の幸福のより多くの部分を提供する <fournit une portion plus considérable à celui de chaque individu> ことになるので、個人が個別的な配慮 <les soins particuliers> に求めねばならないものはより少なくなるからである¹²⁾。(強調は宮本ルソー『社会契約論』)

(…) しかしこうした法はひどく不愉快なものだ。というのも全体の幸福 <le bonheur général> を維持するために個人の幸福の総和 <la somme bonheur particulier> の上前をはね、与えるよりもはるかに多くのものを奪う <elles enlèvent infiniment plus qu'elles ne donnent> からである¹³⁾。(強調は宮本) サド『ジュリエット』

同様に、社会契約は公平なものであり、これによって人はより多くのものを獲得することができるというルソーの主張に対して、サドの盗賊クール・ド・フェールは、社会契約は不公平で不当なものだと反論する。この両者の対立はひたすら、個と全体の関係についての見解の相違に基づくものである。

要するに、各人は自己をすべての人に与えて、しかも誰にも自分を与えない。自分が譲渡するのと同じ権利を受け取らない仲間はひとりとしていないのである <il n'y a pas un associé sur lequel on n'acquiere le même droit qu'on lui cède sur soi> から、人は失うものすべてのものと同じ価値のものを手に入れ、また所有しているものを保存するためのより多くの力を手に入れる <on gagne l'équivalent de tout ce qu'on perd, et plus de force pour conserver ce qu'on a>¹⁴⁾。(強調は宮本) ルソー『社会契約論』

社会の利益と呼ばれているのは、利益の寄せ集めの総体にすぎない。しかし、この個人の利益 <cet intérêt particulier> が一致し、全体の利益に <aux intérêts généraux> 結びつくには譲歩することによってでしかない。ところで、何も持たない者に何を譲れというのだ？ 譲ってみれば、得るものよりも与えるものの方がはるかに多いことがわかって、自分の誤りを認めるこのになるだろうよ <que voulez-vous que cède celui qui n'a presque rien? S'il le fait, vous m'avouerez qu'il a d'autant plus de tort, qu'il se trouve donner, dans ce cas, infiniment plus qu'il ne retire>。したがって契約上の公平さという見地から、このよ

うな契約が結ばれることは回避されなければならない¹⁵⁾。(強調は宮本)
 ジュスチヌ』

サド『新

実際、リベルタンは『社会契約論』を名指して挙げてはいないものの、彼らが、明らかにルソーの表現を反転させることをもって、自らの推論のディスクールとしていることを、こうした多くの例が証明している。何故、彼らはかくも執拗にルソーの言葉を反転させなければならないのか。それはおそらく、個人をひとつの全体の部分として統べる法権力、あるいはひとつの全体という概念そのものに、ルソーが明確で過激な表現を与えたがゆえに、ルソーの言葉は、常に個として全体の外部に身を置くリベルタン＝サドによって、反対命題のなかに頻繁に採用されたのであろう。ルソーの社会契約において、個人が全体に対して行なうのは、ジュスチヌの主張するような「善行の交換」や、デュマルセの「哲学者」が提唱するような「皆さんの信頼と尊敬」に対する「友情と感謝のお返し」などという部分的な交換や部分的な譲渡ではなく、「全面的譲渡 *«l'aliénation sans réserve»*」である¹⁶⁾。全体に対して全面的譲渡を行なうルソーの個人はまた、立法者によって、全体の部分に変えられるべき存在でもある。以下に挙げるのは、ルソーの立法者についての定義である。

いわば人間の本性を変えること、それ自体で完結し、孤立したひとつの全体であるところの各個人を、より大きな全体の部分に変え、その全体から個人がいわば自分の生命と存在を受け取るようにし、人間をより強くし、我々が皆、自然から授かった身体的で独立した存在を、部分的で精神的な存在に置き換えることのできる自信のある人¹⁷⁾。(強調は宮本)
 ルソー『社会契約論』。

こうした立法者によって個人は、「他のすべての人々に頼らなければ、無に等しく、何もできない」(強調は宮本)「市民」になるのだとルソーは言う¹⁸⁾。こうした立法者、こうした市民に対し、完全な個の立場において語るという発話地点以外に持ちえないリベルタン＝サドは、厳しく対立せざるをえない。

さて、全体に統合されることを断固として拒み、共通の利益を認めない、ばらばらの個であるリベルタンたちであるが、よしんば、彼らが一緒に行動するとしても、彼らを結びつけているのは「美德ではなく、利益とエゴイズム」であり¹⁹⁾、利益と裏切り行為を楽しむためならば、仲間同士殺し合うことも辞さない²⁰⁾リベルタンの「私」にとって、「あなた」は最終的には否定の対象に他ならない。『ジュリエット』に登場するサン・フォンは家柄と富を誇り、王を凌ぐほどの権力を掌中に収め、自分が人間という「下劣な生き物」の間に「生まれたこと

が、しばしば恥ずかしくてたまらなくなる」²¹⁾と口外して憚らない傲慢なりベルタンであるが、彼は快樂と犯罪のパートナー、ジュリエットに次のように命ずる。

わしには決して馴々しく話し<tutoyer>かけないでもらいたい。わしのように距離をおいて話すように、そして何よりも、わしを呼ぶ時には、絶対に閣下という呼び方以外は使わないように。できるかぎり、三人称で話すこと、そしてわしの前ではいつも尊敬の態度を崩さないように²²⁾。

「馴々しく」話せないこと、「距離をおいて」話すこと、目の前にいる人に「三人称で話す」こと、つまり、話すことは人と人を引き離す<isoler>こととなる。リベルタンの「私」は他者の現前、否、存在そのものを退けようとするのだ。

『告白』においてジャン=ジャックは身の上話を語ることで、ヴァランス夫人を筆頭に、何人もの聞き手の心を引きつけるが、本来、話す「私」と聞く「あなた」を結びつけるのが、話すことの基本的な機能であろう。『新ジュスチヌ』におけるジュスチヌも、「親身になってきちんと彼女の嘆きに耳を貸してくれる」²³⁾ 聞き手を求めて旅を続け、身の上話を語り続ける。しかし、話すことが「私」と「あなた」を結びつけるという機能を持ちえない作品世界にあって、ジュスチヌが稀に「嘆きに耳を貸してくれる」相手に巡り会うことがあっても、そうした人々はすべてリベルタンの犠牲者とならざるをえない。ジュスチヌの話聞いて、彼女を無実の罪から救おうとしたブレサック夫人は息子に毒殺され、ジュスチヌの熱心な勧めに従ってキリスト教信者となったロザリーは、父親によって生体解剖の犠牲者にされる。ジュスチヌに結婚を申し込んだ商人デュヴレイユはデュボワに毒を盛られる……リベルタンたちの言語活動が、逆説的ではあるがひとつの内部を形成している世界にあって、心やさしい犠牲者たちは、話すことと聞くことで、「私」と「あなた」がひとつになるという言語活動上の過ちを犯したために、この裏返しの内部によって罰せられたのだと言ってもよかろう。言葉による違反によってサドが革命後の社会から抹殺されたように、言語活動上の違反によって犠牲者たちは作品世界から排除されてゆく。

3

言語活動上の違反が、ジュスチヌや犠牲者たちをリベルタンの犠牲者たらしめているサドの作品世界であるが、しかし、犠牲者の側から言えば、すなわちイデオロギー内部から見れば、言語活動上の違反を犯しているのは、人と人を引き離すために話し、ディアローグを拒絶

しつづ言葉を交わすリベルタンたちの方であることは言うまでもない。つまり、本来言語活動上の違反と呼ぶべきものが、作品世界においてはルールとなっているのである。ルールは、ジュスチヌや犠牲者たちが行なうようなイデオロギー内部の常識に則った言語活動を逸脱することによって遵守される。逸脱とは要するに、「私」と「あなた」の間で了解されているはずの通常の意味作用をずらすことによって、「私」と「あなた」を結びつける絆を解くことに他ならない。

最も単純な逸脱は、原因と結果の結びつきにおいて現われる。「死刑ですって？私が死刑に値するような、いったい何をしておっしゃるのですか」という犠牲者の抗議に対し、リベルタンは次のように言い放つ、「死刑に値しているならば、この淫売、おまえを死刑になどしないだろうよ」¹⁾。あるいはまた、一人称体の語りにおいても、リベルタンのディスクールには同様の逸脱が観察される。

この正直者の一家が相手なら、この恩人から受けた恩を犯罪によって報いてやる方法がいくらかもあるということがわかっていただけに、おれはその申し出を大喜びで受け入れた²⁾。

さらにまた、これはロラン・バルトも引用している例であるが³⁾、ある大金持ちのリベルタンが裕福な人妻を抱く時に言う台詞は次のようなものである。

あなたは金持ちだそうだね。それでは、あなたにお金を払わなければならない。あなたが貧乏だったら、あなたから盗んでやるところだが。しかし貧乏でないのだから、あなたはうんと高い値段で、私に体を売るのだ⁴⁾。

無実だから死刑にし、恩を仇で返し、貧乏人から盗み、金持ち女に多額の金で体を売らせる、これらは、イデオロギー内部において、すでに何度も日常的に語られてきたディスクールにおける因果関係を歪ませたものといってよからう。

こうした因果関係の逸脱から、物語の出来事の在り方が変わってしまう場合もある。徴税請負人デュブールは、3つのジュスチヌ物語に登場するリベルタンであり、いずれにおいても彼はジュスチヌから苦勞話を聞かされるが、その時の彼の態度は一様ではない。ジュスチヌを語り手とする最初の物語『美徳の不幸』において、デュブールはジュスチヌの話を「かなり熱心に聞いて」⁵⁾いる。これは、人が一生懸命に話をしているのだから聞き手も熱心に聞くのだという、イデオロギー内部の因果関係に即した態度である。ジュスチヌというイデオ

ロギー内部の言語活動を担う語り手のディスクールのなかに置かれることで、このリベルタンは語り手と同じ種類の言語活動を見せているのである。ところが、非人称的な語り手によって語られる3番目の『新ジュスチヌ』になると、この因果関係が完全にこわれてしまう。ジュスチヌの言語活動から解放されたリベルタン、デュブルはジュスチヌの不幸な話を聞くことで、彼女に対する「淫欲を燃え上がらせ」、「ジュスチヌの嘆きの悲壮な抑揚に合わせて、年老いた顔の筋肉を色情に歪ませ」ながら、「ガウンの下で手慰みをして」⁶⁾ 憚ることがない。リベルタンの言語活動によって支配される『新ジュスチヌ』や『ジュリエット』では、こうした逸脱がダイナミズムとなって物語を大きく発展させていると言ってよさそう。

逸脱はまた、本来対立概念にある表現と内容を結びつけることから生じる。美德を讃える表現を悪徳のために用いるのは、その一例である。次に挙げるのは、放蕩貴族ブレサックが伯父のジェルナンドにデテルヴァル夫妻を紹介する際の口上である。

伯父さん、ソンプルヴィルご夫妻はむしろデテルヴァルという名前で知られておりますが、ご夫妻はあらゆる美質を備えておられるので、伯父さんもこの方々となら気持の良いお付き合いができることでしょう。ご夫妻の徹底的な不道德ぶりは伯父さんのお気に召すこと受け合いです⁷⁾。(強調は宮本)

「あらゆる美質 <toutes les qualités>」、「気持のよいお付き合い <leur connaissance agréable>」という推薦状のような表現の間に、「徹底的な不道德ぶり <leur profonde immoralité>」という場違いな表現を闯入させることで、このブレサックのディスクールは単にこの夫妻についての情報を与えるという意味内容を超え、いわゆる儀礼的なディスクールというものを無効にし、「美質」や「気持の良い」という言葉にその本来の意味、少なくとも辞書に書かれているような意味を裏切らせる。

このブレサックは、また、自分の無神論に対する熱意を表明するにあたって、信仰を語る表現を横領する。

無神論が殉教者を望むなら、そう言うがいい、おれはいつでも血を流す覚悟だ⁸⁾。(強調は宮本)

実際、皮肉にも、サド自身、1793年、国民議会で無神論の演説をぶちあげたのをきっかけに、ロベスピエールによって革命政府の牢獄に押し込まれ、危うくギロチン台で血を流すところであったのだが、テキスト内においては、この発話者リベルタン＝サドの無神論に対する熱意よ

りも、信仰への熱意を語る紋切り型表現を無神論のために用いることで、こうした紋切り型表現そのものと、「殉教者」という言葉の意味が、ディスクールの中で弄ばれているということの方に注目したい。リベルタン＝サドは言葉本来が持つ方向性を逆向きにすることを楽しんでいるのだ。

あるいはまた、リベルタンは、全体と部分、あるいは全体と個という概念を翻弄する。そうすることで、この「全体」に修飾されることによって意味をなしていた概念まで骨抜きにしよう。以下に挙げるのは、盗みをして捕えられたジュリエットを不正な手段で救いだす一方、身代わりに他の無実の娘に罪を擦り付けて、祝杯を上げるリベルタンたちの言葉である。

「(…………) これでこそ、あなたは法や君主から委ねられている権力を立派に活用されたというわけだ」

「これ以上うまく活用はないだろう」とサン・フォンが答えた、「自分のために働く時ほど、見事に働くことはないからな。我々は人類の幸福 <le bonheur des hommes> のために権力を委ねられている。だから、我々とこの可愛い小娘のために働かなくてどうするね」

「我々は権力を委ねられたとき」とダルベールが言った「これこれの人とか、漠然とあした人、こうした人を幸福にするように言われたわけではない。ただ、人類の至福 <la félicité des homme> のためにと権力を渡されたただけだ。ところで、すべての人を平等に幸せにする <rendre tout le monde également heureux> のは不可能なことだ。だから我々の何人かが満足すれば、それで目的は達せられたことになるのだ」

「しかし」とノワルスイユは言った(…………)、「罪ある者を助け、無実の者をおとしめるならば、やはり全体の不幸 <le malheur général> のために働くことになるでしょうな」

「そんなことはない」とサン・フォンが答えた、「悪徳は美德よりはるかに多くの幸福をもたらすものだ。だから美德に褒美をやるよりも、悪徳を庇ってやることで、私は全体の幸福 <le bonheur général> にずっと貢献しているわけだ」⁹⁾

「人類の幸福」、「全体の幸福」という、ルソーのみならずその他のフィロゾフにとってのいわばキーワードが、リベルタンの逸脱のディスクールのリレーのなかで、まるでリベルタンに囲まれて、いたぶられている犠牲者の肉体のように、弄ばれている。とりわけ注目したいのは、「人類」や「全体」というリベルタンの在り方と対立する概念が、彼らリベルタンという個人に置き換えられることで、「幸福」が彼らによって横領されていることである。その結果、「人

類の幸福」や「全体の幸福」といった言葉がこの時代に持っていたであろう、輝かしい響きが踏み躪られ、あたかも横領金のごとく扱われている。ここにおいて全体と個の対立が、「幸福」をめぐる、一気に頂点を極めると同時に崩壊し、さらに「全体の不幸」と「全体の幸福」が同義になることで、全体と部分、幸福と不幸、美德と悪徳、すべての意味が無になってしまう。ジュリエットの先輩、クレルヴィルは、ジュリエットに「あなたの良心が、二度とまっすぐに戻れないほどにねじれて 《tordue》 しまうように（強調は宮本）」¹⁰⁾と要求するが、彼らが実際に言語活動において「二度とまっすぐに戻れないほどにねじり」まわしているのは、言葉の意味そのものである。18世紀の愛他的イデオロギーのキーワードが、結実する前に腐って落ちてしまう果実のように、リベルタンのディスクールの中かで意味を結ぶことなく無駄に腐ってゆく。

リベルタン＝サドのディスクールは、ここにおいて、柔らかな桃を腐らせるために弄くり廻す、執拗な指のようなものである。この執拗な指で、18世紀の文化が書いてきたテキスト、そして聖書という大文字のテキストを、べたべたと遠慮なく触り、毀損してしまおうというのである。すでに語られてきたことを無効にするために語ること、それがリベルタン＝サドにとっての言語活動となる。

これに対し、ジュスチヌとその他大勢の犠牲者たちは、大文字のテキストやイデオロギーがすでに語ってきたことをそのまま語るという言語活動を行なう者たちである。リベルタンと犠牲者たちを隔てるのは、こうした言語活動の質的違いである。しかし、両者の関係が単なる質的違いによる対立関係に終わらないのは、前章でもすでに見てきたように、そこにそれぞれの言語活動の量の問題と、それが実行される場の問題が入ってくるからである。

例えば、同じジュスチヌ物語でも、最初の物語、すなわち『美德の不幸』では、ジュスチヌの一人称体の語りによって物語全体が語られることはすでに述べた通りである。ジュスチヌや犠牲者たちの言語活動と、対するリベルタンの言語活動のそれぞれの質については、根本的には、非人称的な語り手によって語られる3番目の物語『新ジュスチヌ』も最初の物語も大差ない、と言いうるかもしれない。しかしそれぞれの言語活動に与えられる量と場については、最初の物語と3番目の物語の間で逆転が見られる。つまり、ジュスチヌによって語られる最初の物語においては、内部の外部として、ジュスチヌの語りのなかに紛れ込んでいたリベルタンのディスクールが、3番目の物語においてはひとつの内部を形成し、そのなかに外部として、ジュスチヌのディスクールが紛れ込む。そしてこの量と場の変化が、リベルタンの言語活動に一層の発展をもたらすことで、ジュスチヌの言語活動との質的差異を押し広げるのみならず、意味の座標軸を狂わせるのだ。『新ジュスチヌ』に続く『ジュリエット』において、淫乱な修道院長デルベヌ夫人は13歳になったばかりのジュリエットを、「人類の

あらゆる美德を悪徳と考え、すべての犯罪を美德と見做すことに慣れるよう」¹¹⁾ 教育するが、こうしたディスクールが単に全体における部分、内部に紛れ込んだ外部であるならば、罪のない言葉遊びで済ませることもできよう。逸脱はやがて本筋に戻ることで回収されるだろう。しかし、これが全体にひろがり、ひとつの内部を形成しているとあれば、美德と悪徳、美德と犯罪を分類し、信仰と無神論を対置する座標軸が歪んだままになり、ジュスチヌのディスクールが本来の意味内容を持ちえなくなる。すなわちイデオロギーそのものが揺らぐことになる。

ダイアン・マクダネルはいみじくも、ディスクールを「意味生産の場」として定義しているが¹²⁾、サドにおいてはさらに、この「意味生産の場」であるディスクールの場、つまり、意味生産の場所の場所がどこに設定されているかが問題なのだ。ミシェル・ドゥロンはサドの作品群を2種類に分け、サドが実名で発表した作品群を「公教的」作品群、匿名で発表した作品群を「秘教的」作品群と呼び慣わしているが¹³⁾、両者を不可逆的に分かつのは、作中で繰り広げられる犯罪や推論の表現の露骨さや意味の甚だしさといった、言葉の質や思想内容の問題ではなく、実は、リベルタンのディスクールが内部の外部に置かれているか、それとも逆説的であれひとつの内部を形成しているかという、場所の問題なのである。

実際、サドにとって、書くということは、何かを伝えるために書く、何かについて書く、つまり目的語を持って書くということではなく、ほとんど常に言語活動の実践の一環として書いていたものと思われる。それは彼が作家として小説という、いわば虚構のなかでの言語活動を行なう以前から始まっていたらしい。サドが獄中から多くの手紙を書いたことはつとに有名であるが、投獄される以前のサド、一介の青年放蕩貴族に過ぎなかったサドも数多くの手紙を残している。その頃のサドは、自分が書いた手紙を『作品集』に収めるために、下男にして放蕩の子分であったカルトロンに清書させているが、そのなかには実際に相手に送られたものと送られなかったものが一緒に収められている。そして、実際に送られたものにおいても、送られなかったものにおいても、多くの手紙において、彼は言葉を弄んでいる。自分を捨てた恋人宛てに、いかにもとってつけたような、情熱的な表現を並べたてるサド¹⁴⁾。パトロンを次々に喰いものにしていく百戦錬磨の女優に宛てて、あたかも『危険な関係』のトゥールヴェル法院長夫人のように貞淑な貴婦人を口説くような言葉を連ねるサド¹⁵⁾。相手に自分の愛情や欲望を伝えるために書いているというよりも、恋愛のディスクールがすでに書いてきたことを、誇張し、歪曲し、無効にするためのディスクールの実践として書いているのだと思わざるをえない。もちろん、彼が自分の現実を虚構のように生きていたというつもりはない。後年、18世紀の知性や文化がこれまで書いてきたことを弄び、無効にしつつ、独自の創造に向かうように、サドにとって書くということは、彼が小説を書く以前から、まず何よりも言語活動の実践であ

り、この実践こそがやがて、彼にとって生きることとなるのだ。

なぜならば、こうした実践を繰り返すことが、リベルタンのディスクールを生みだすのみならず、本来ならばイデオロギーの内部の外部にあるべきこのディスクールの位置を、テキストのなかで逆転せしめるからであり、この逆転はすなわち、書いているサドが余儀なくされている発話地点を世界の中心に据えるものであるからだ。白い紙の上に世界の意味を書き変えてゆくこのエクリチュールこそが、サドの生をもそこに書き込んでゆく。

[註]

0

- 1) ロバート・ダーントン著、海保真夫・鷺見洋一訳『猫の大虐殺』岩波書店、1990年、217-218ページ (Robert Darnton, *The Great Cat Massacre and Other Episodes in French Cultural History*, 1984)
- 2) 同書 (邦訳、213ページ)
- 3) 宮本陽子「新エロイズにおける声とまなざしの相剋」、市川慎一編著『ジャン=ジャック・ルソー、政治思想と文学』早稲田大学出版部、1993年、147-187ページ参照。
- 4) デイドロ、グランベール編、桑原武夫訳編『百科全書、序論および代表項目』岩波書店、1971年、138ページ (Diderot et d' Alembert, *Encyclopedie*, 1751-1780)
- 5) ダニエル・モルネ著、市川慎一・遠藤真人訳『十八世紀フランス思想、ヴォルテール、デイドロ、ルソー』大修館書店、1990年、86ページ (Daniel Mornet, *La pensée française au XVIII^e siècle*, Armand Colin, 1926, 1969)
- 6) 同書 (邦訳、66ページ)
- 7) 同書 (邦訳、72ページ)
- 8) 同書 (邦訳、199ページ)
- 9) 同書 (邦訳、121ページ)
- 10) 同書 (邦訳、237ページ)
- 11) Sade, *Justine ou les Malheurs de la vertu*, 1791
- 12) Maurice Lever, *Donatien Alphonse François, marquis de SADE*, Fayard, 1991, p. 524.
- 13) Rétif de La bretonne, *Monsieur Nicolas*, Bibliothèque de la Pléiade, 1989. Sade, *Œuvres I, Dialogue entre un prêtre et un moribond, Les cent vingt journées de Sodome ou l' école du libertinage, Aline et Valcour ou le roman philosophique*, Bibliothèque de la Pléiade, 1990.
- 14) 1768年、復活祭の日曜日、失業中の女工ローズ・ケレルをパリ郊外のアルクイユの借家に連れ込み、そこで彼女を鞭打ち、冒瀆行為を行なったこととそれに付随する一連の事件。
- 15) 1772年、下男のアトールと共にマルセイユで4人の娼婦を集め、彼女たちに催淫薬入りのボンボンを食べさせ、鞭打ちとソドミーに耽ったこととそれに由来する一連の事件。
- 16) *Mémoires de Barras*, éd. Georges Duruy, Paris, Hachette, 1895, pp. 56-57, cité par Maurice Lever, *Donatien Alphonse François, marquis de SADE*, pp. 564-565.
- 17) Sade, *L' Histoire de Juliette ou les Prospérités du vice*, 1797. *Œuvres complètes*, Paris, Cercle du livre précieux, 1967, t. VIII, p. 504.

1

- 1) *Le Tribunal d' Apollon, ou Jugement en dernier ressort de tous les auteurs vivants; libelle injurieux, partial et diffamatoire, par une société de pygmées littéraires*, Paris, an VIII, t. II, p. 193, cité par Michel Delon,

- 《Introduction》, *Œuvres*, Bibliothèque de la Pléiade, t. I, p. xxx.
- 2) Mme Clément-Hémery, *Les Femmes vengées de la sottise d'un philosophe du jour*, Paris, 1801, cité par Michel Delon, 《Introduction》, *Œuvres*, t. I, p. xxx.
 - 3) Maurice Lever, *Donatien Alphonse François, marquis de SADE*, Fayard, 1991.
 - 4) *Ibid.*, p. 167.
 - 5) *Ibid.*, p. 167.
 - 6) *Ibid.*, p. 167.
 - 7) ミシェル・フーコーはその著書『監獄の誕生』(Michel Foucault, *Surveiller et punir, naissance de la prison*, éd. Gallimard, 1975)において、17, 18世紀に見られる国家権力の新しい実行形態を規律・訓練の権力と呼んでいる。犯罪者に対して行われる見せしめとしての残虐な処刑や王の派手な儀式のなかに、その力を顕在化させることによって、臣民を服従させていた権力が、この見せ物的なものから次第に、個々人を監視する規律・訓練的なものへ変わっていったのだとフーコーは言う。サドの時代において、マレー警視が行なった個人の放蕩の監視は、この個々の人を監視する権力形態の典型である。「サド伝」の著者モーリス・ルヴェはマレー警視について次のように述べている。< Louis Marais passe avec raison pour le policier le plus expert en libertinage; on l'appelle 《contrôleur des actes à Cythère》. Au courant de tous les secrets d'alcôve et de coulisses, il court les bas-fonds et les mauvais lieux, inspecte les hôtels garnis, file les prêtres débauchés, épie les galanteries des gentilshommes, connaît le traif des filles d'Opéra et les pensions versées par leurs protecteurs. Paris n'a pas de secret pour lui: aventures, intrigues, jalousies, rivalités, parties fines, liaisons, infidélités, ruptures, scandales petits ou grands, tout parvient à son oreille. Il reçoit les confidences des filles et des matrones, et serait capable de décrire par le menu les extravagances de leurs clients, avec le détail des débauches nocturnes ou diurnes consommées dans leurs établissements ou par leur intermédiaire. De tout cela, il dresse des rapports qu'il adresse à M. de Sartine, lequel en tire des notes destinées à Louis XV, qui se régale à la lecture de cette chronique scandaleuse. Il y a déjà quelque temps qu'on a mis cet argus de la galanterie sur les traces de Sade. Pendant des années, il va s'attacher à ses pas, le suivre avec un flair de limier et rapporter sur son compte les plus scabreux excès. Désormais, le marquis devra compter avec cet homme qu'il regarde avec mépris, mais dont il craint la ruse. > (Maurice Lever, *Donatien Alphonse François, marquis de SADE*, pp. 130-131.
 - 8) Maurice Lever, *Donatien Alphonse François, marquis de SADE*, p. 168.
 - 9) *Ibid.*, p. 168.
 - 10) *Ibid.*, p. 168.
 - 11) *Ibid.*, p. 216.
 - 12) *Ibid.*, p. 217.
 - 13) Michel Delon, 《Introduction》, *Œuvres*, t. I, p. XII.
 - 14) サドの貴族意識に基づく傲慢な態度については、ルヴェの「サド伝」において何度も言及されているが、すでに形骸化していた領主歓待の儀式をサドが強要したことはその端的な例であろう。こうしたいわば時代遅れの貴族意識を固持する一方で、彼が文筆という労働によって金銭を稼ぐことにやぶさかではなかったことも、つけ加えておく。
 - 15) 1793年9月17日、国民公会によって可決された法案。共和国の敵であると認められた者、あるいは見做された者を逮捕、拘留する法案である。品行、交友関係、言ったり書いたりしたこと等すべてが、逮捕、拘留の理由となった。
 - 16) Sade, *La Philosophie dans le boudoir*, 1795.
 - 17) Sade, *La Nouvelle Justine, ou les Malheurs de la vertu, suivie de L' Histoire de Juliette, sa soeur ou les Prospérités du vice*, 1797.
 - 18) Sade. *Aline et Valcour ou le roman philosophique*, 1795.
 - 19) Sade, *La Nouvelle Justine, ou les Malheurs de la vertu, suivie de L' Histoire de Juliette, sa soeur ou les Prospérités du vice*, 1797.
 - 20) サドの父、1702年生まれのジャン＝バチスト・フランソワ・ジョゼフ・ド・サドはヴォルテールと、またサドの叔父、1705年生まれのサド神父はヴォルテール、シャトレ夫人と交際があった。

- 21) Dumarsais, 《Philosophe》, *Encyclopédie*, t. X II, p. 510, col. b, cité par Jean Deprun, 《Sade philosophe》, *Œuvres*, t. I, p. LX II.
- 22) デイドロ, ダランベール編, 桑原武夫訳編『百科全書』, 岩波書店, 1971年, 143ページ (Diderot et d'Alembert, *Encyclopédie*, 1751-1780)

2

- 1) Sade, *L' Histoire de Juliette, sa sœur ou les Prospérités du vice*, *Œuvres complètes*, Cercle du Livre Précieux (以下この版についてはO. C. とする), Paris, 1967, t. VIII, p. 557.
- 2) *Ibid.*, p. 561.
- 3) *Ibid.*, p. 561.
- 4) 本論第0章38-39ページで引用。Maurice Lever, *Donatien Alphonse François, marquis de SADE*, pp. 564-565.
- 5) Sade, *La Nouvelle Jusutine ou les Malheurs de la vertu*, O. C., 1966, t. VI, p. 146.
- 6) 宮本陽子『サドにおけるまなざしの問題』, <広島女学院大学一般教育研究紀要>, 第2号, 1992年7月, 49-80ページ, 参照。
- 7) Sade, *L' Histoire de Juliette*, O. C., t. VIII, pp. 172-173.
- 8) 本論第1章44ページで引用。Dumarsais, 《Philosophe》, *Encyclopédie*, t. XII, p. 510, col. b, cité par Jean Deprun, 《Sade philosophe》, *Œuvres*, t. I, p. LX II.
- 9) Sade, *La Nouvelle Justine*, O. C., t. VII, p. 166.
- 10) Jean-Jacques Rousseau, *Du Contrat social*, *Œuvres complètes* (以下この版についてはO. C. とする), Bibliothèque de la Pléiade, 1967, t. III, p. 368. なお, 引用の綴りはこの版にしたがった。
- 11) Sade, *L' Histoire de Juliette*, O. C., t. VIII, p. 143.
- 12) Rousseau, *Du Contrat social*, O. C., t. III, p. 429.
- 13) Sade, *L' Histoire de Juliette*, O. C., t. VIII, p. 144.
- 14) Rousseau, *Du Contrat social*, O. C., t. III, p. 361.
- 15) Sade, *La Nouvelle Justine*, O. C., t. VI, p. 147.
- 16) Rousseau, *Du Contrat social*, O. C., t. III, p. 361.
- 17) *Ibid.*, p. 381.
- 18) *Ibid.*, p. 382.
- 19) Sade, *La Nouvelle Justine*, O. C., t. VI, p. 147.
- 20) 『ジュリエット』においては, 多くのリベルタンが仲間同士殺し合う。ノワルスイユは自分の出世のために大臣サン・フォンを殺害し, ジュリエットとクレルヴィルは快楽の仲間オランプを火山の噴火口に突き落とす。さらにジュリエットはこのクレルヴィルにも, 毒薬使いデュランに唆されて毒を盛る。
- 21) Sade, *L' Histoire de Juliette*, O. C., t. VIII, p. 233.
- 22) *Ibid.*, p. 209.
- 23) Sade, *La Nouvelle Justine*, O. C., t. VII, p. 88.

3

- 1) Sade, *L' Histoire de Juliette, sa sœur ou les Prospérités du vice*, *Œuvres complètes*, Cercle du Livre Précieux (以下この版についてはO. C. とする), 1967, t. IX, p. 319.
- 2) *Ibid.*, p. 238.
- 3) Roland Barthes, *Sade, Fourier, Loyala*, Paris, Seuil, 1971, p. 172.
- 4) Sade, *La Nouvelle Jusutine ou les Malheurs de la vertu*, O. C., 1967, t. VII, p. 174.
- 5) Sade, *Les Infortunes de la vertu*, O. C., Paris, 1967, t. XIV, p. 344.
- 6) Sade, *La Nouvelle Justine*, O. C., t. VI, p. 96.
- 7) *Ibid.*, O. C., t. VII, p. 123.

- 8) *Ibid.*, O. C., t. VI, p. 193.
- 9) Sade, *L' Histoire de Juliette*, O. C, t. VIII, pp. 206-207.
- 10) *Ibid.*, O. C., t. VIII., p. 431.
- 11) *Ibid.*, O. C., t. VIII, p. 28.
- 12) ダイアン・マクドネル, 里麻静夫訳『ディスクールの理論』新曜社, 1990年, 5 ページ (Diane Macdonell, *Theories of Discours, An Introduction*, Basil Blackwell, 1989)。
- 13) Michel Delon, <Introduction>, *Œuvres*, Bibliothèque de la Pléiade, 1990, t. I, p. XX II.
- 14) Gilbert Lely, *Vie du marquis de Sade, avec un examen de ses ouvrages*, Paris, Cercle du livre précieux, 1962 (t. I et II des *Œuvres complètes* du marquis de Sade), t. I, pp. 68-71.
- 15) *Ibid.*, pp. 149-150.